大学の国際戦略と日本語教育

総長室調査役、グローバル人材育成センター開設準備室長、経営学部教授
山口　和範 氏

○**高村**　それではただいまより、第 2 部、パネルディスカッションを始めさせていただきます。テーマは「立教大学の国際化と日本語教育」です。まずはパネリストの先生方のご紹介をさせていただきます。

向かって左から、総長室調査役グローバル人材育成センター開設準備室長、経営学部教授、山口和範先生。（拍手）

国際センター長、法学部教授、松田宏一郎先生。（拍手）

筑波大学名誉教授、石田敏子先生。（拍手）

前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授、池田伸子先生。（拍手）

以上 4 名の先生方です。コーディネーターは日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授、丸山千歌先生です。（拍手）

なお、第 1 部の講師でいらっしゃいました西原先生には、コメンテーターとしてご参加いただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは丸山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○**丸山**　それではこれから 8 時半までの短い時間ではございますが、第 1 部の西原先生のご講演を受けまして、日本の社会がどうしてこれから、それから、大学がどうしてこれから国際化が必要なのかというお話、そしてそういった国際化の動きが、大学の学生、それから留学生に、どういったいい影響をもたらすのかといったお話をいただきました。これを受けて、これから、それでは立教大学の国際化と、それから日本語教育、どのような意義と可能性があるのかということについてご発題いただきたいと思います。山口先生と松田先生からは、大学の国

際化の観点から、そして石田先生は、学外の日本語教育のご立場から、そして池田先生には、学内の日本語教育の立場から、ご発題いただきたいと思います。それぞれ 10 分でお話しいただいて、残りの時間を参加者の皆様と一緒に話し合うという時間にいたしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○**山口**　経営学部の山口です。よろしくお願いいたします。私のほうには、池田先生から、大学の国際戦略と日本語教育ということで話をしてくれということで、調査役の立場で、今国際化に向けたいろいろな意味での戦略を練るよう総長のから指示を受けていますが、その立場と、もう一つは経営学部に所属していて、ある意味、日本語教育センターに期待するということ、ある種応援団ということで、話をさせていただきたいと思います。

立教大学のこれまでの国際化というのは、当然設立当初から、国際化ということは、自明の理みたいなところがあったかと思いますが、最近の動きとして、我々がここ 10 年近くということで考えると、いわゆる「李答申」と大学で呼ばれている国際化推進の答申が 2006 年に出ました。日本語教育センターができるきっかけになった答申でも多分あると思います。この中では、立教大学国際化推進会議を設置し、国際化担当の副総長を置く。日本語教育課程の充実ということが、この答申の中でうたわれていて、その成果として、日本語教育センターができたと思います。

この答申の中では、先ほど多言語の話があったかと思いますけれども、立教はどういう意味での国際化を目指さないといけないかということについては、多文化、多言語能力のグローバル市民の育成を目指すというとらえ方がされ、私が今所属している経営学部は 2006 年に発足をしているのですけれども、その後の異文化コミュニケーション学部の設置なども、この流れに乗ったことかと思います。

ただ、この 2006 年の李答申というのはなぜでできたかというと、2005 年に、いわゆる、文科省的に言うと、多分最初の国際化に向けた補助金といいますか、そこの話があって、そこに立教大学はきちんと対応できなかったという反省のもとに、国際化をきちんと進めないといけないということで、この 2006 年に、「国際化推進答申」というものができて、この中では、例えば留学生の数ということで言うと、受け入れ 500 人を目指すということが明記されており、今、ほぼ達

成されているような状況ではないかと思います。それから 5 年、6 年がたって、実は 2011 年、2012 年、先ほど話にあったような、世界展開力の話であるとか、グローバル人材育成ということで、文科省のほうの補助金は、応募しているのですけれども、立教大学として採択をされていないというのが、実は立教大学の実情です。2012 年、グローバル人材育成推進事業のところの一環として、国際化推進本部をきちんともう一つ立て直して、立教大学の国際化を図るということで、現在、さまざまな議論を進めています。

立教大学において、教育の国際化がどういう形で進んできたかというと、やはり言語教育ということで言うと、新たな言語教育のパイオニアとして、日本においてのパイオニアとして、全カリがいわゆる言語教育の改革をスタートし、全カリ第 2 ステージでも、またさらなる改革が行われたと。留学プログラムであるとか、海外プログラムということについても、さまざまな意味での拡大がされてきたのではないかと思います。

私が関わっているところで、経営学部のことで少し話をし、日本語教育センターのほうに期待することというふうに話を持っていきたいのですけれども、国際化を非常に意識した学部ということで、経営学部と異文化コミュニケーション学部というのが取り上げられるのではないか。もちろんいろいろな、例えば観光学部というところでも、当然ほかの学部でも、いろいろな取り組みがされているのですけれども、世の中がグローバル化したということで、例えば、経営学部というのは、当然経営の現場に人を送り出すということで言うと、そこに最も直面をして、教育内容を変えていかないといけない。そういう意味で、グローバル化、国際化ということについては、一番フロントランナーと言うと言い過ぎなのかもしれませんけど、直面をして、教育を変えていかないといけない分野です。

先ほどの英語のみでという話で言うと、実は経営学研究科の大学院の国際経営学専攻は英語のみで学位を取れます。あと、ダブルディグリー制度も既に導入をしています。ここは海外から学生を呼ぶ、日本語ができない学生を呼びます。ただ、日本語ができない学生を呼ぶために必要なものというのは、実は日本語教育センターであって、日本語ができるようになってから来てもらうというよりは、できなくても来られる。ただ、その後は日本で、きちんといろいろなことができるようになる。アカデミックな意味、プロフェッショナルな意味、生活をする意味と、先ほど 3 段階に分けて説明があったかと思いますけども、その部分を充

実させていくという意味では、非常に日本語教育センターのほうに期待をしています。

最後に国際化認証と、このスライドでは書いているのですけれども、国際化ということを進めていく上で、これまで日本の高等教育機関というのは、ある種の日本語のバリアというのがあって、バリアと言うと言い過ぎかもしれませんけども、いわゆる国際水準であるというよりは、国内ということを基準にして、いろいろな意味での競争をしてきたかと思います。ただ、大学の教員は、ある種、研究者としてということで考えると、常に国際競争を強いられていた。ただ、日本語を使う人たちが、国際的に見ると限られているということで、日本の学生も、ある種、守られていました。

ところが、いろいろな意味でのグローバル化が進むに際し、今の大学生は、いわゆる日本国内での競争ということよりは、もっと広い意味での競争にさらされている。その意味で言うと、大学の教育というのも当然国際化しないといけないし、国際水準の教育を行っていないと、そこにいる学生が不幸になるというか、損をすることになりますので、そういう意味で言うと、国際レベルの教育を行うということが非常に重要で、たまたま、実はきょうから３日間、経営学部は国

際認証のプロセスにあって、その中でもかなり、いろいろな意味での海外との比較などを指摘されています。これについては今後の、立教大学が国際化していくということで言うと、非常に重要な視点を与えてくれるものではないかと思っています。

日本語教育センターへの期待ということをお話しして終わらないと時間がなくなりますね。実は日本語での教育が、きちんと高等教育機関でできていたということは、日本社会が相当進んでいたという意味でもあって、そのこと自体はものすごく大切にしないといけないんだと思います。ただ、海外から学生が来て、立教で学ぶ意義。先ほど質問があったことと絡むのですけれども、海外で日本を学びたいという学生は非常に多い。ただ、日本語ができないと学べないという状況で受け入れるというのは、かなり厳しいというか、マーケットとして、損をしていると言うと言い過ぎかもしれませんけど、英語のプログラムが存在するということで、かなり受け入れられるようになる。ただ、そのときに、では英語で完結するかというと、当然完結しないので、そこで、日本語の学習ということも重要な要素だし、日本語を後で学ぶという環境をそこに用意してもらえれば、学部としては非常にありがたいということです。

あとは人口が減少という話があったときに、今後の高等教育機関の 1 つの役割としては、日本に定着してくれる、いわゆる高度な人材、海外からの人材を受け入れる。その最初のゲートウェーになるということが、1 つの役割としてあるのではないか。これから少子化で、日本の人口がどんどん減っていく。日本の経済は縮小するだけだということを言い続けていても、人口予測はそうなんですけども、その予測を変えるための施策というのが当然必要で、その 1 つの役割を、高等教育機関というのは果たさないといけないのではないかと思っています。

そういう意味で、立教大学で日本語教育センターが 2 年前に発足して、今後ますます発展していって、あまり言うと怒られるのであれですけれども、いろいろな意味での、そういう留学生が来やすいような仕組みということを、大学全体として、先ほどの国際化推進本部のほうで検討していこうと思っています。ですから、ますます日本語教育センターのほうには頑張っていただかないといけないと思っていますので、よろしくお願いいたします。

ちょっとオーバーしたかもしれません。すみません。以上で私の話は終ります。（拍手）